

◆連載

いま留萌をむかひ

●町政から市政へ

昭和22年10月1日、留萌の新しい出発を祝うかのような青空が広がっていた。留萌町民の長い間の悲願であった留萌市の誕生である。

留萌町民の市制への気運は明治43年に始まる留萌港の修築頃からである。その後の大留萌建設事業の推進と完成によって、留萌町民の気運は一段と盛りあがったのである。

しかし、その後日本は太平洋戦争へと突入し、この問題も一時棚上げとなってしまう。昭和20年8月、日本は連合国へ降伏し終戦となる。だが、日本中が敗戦に打ちひしがれていた中で、留萌は、日本の再建の一翼を担い、将来へ向けて、発展させようとしていた。そこで、昭和21年末の町議会での増川議員の発言に端を発して、急速に市制移行への世論が沸きあがった。翌昭和22年1月31日、留萌劇場で全町民大会を開き、全会一致で、留萌市制促進期成会が

結成された。ここで、市制施行についての全町民の意志は統一され、この運動の盛りあがり最高潮に達した。その後、正式に2月27日町議会の議決をへ、さらに、5月に地方自治法が施行されたことにより、改めて6月30日に再議決し、正式に市制施行の中央への陳情を行えるようになった。この年公選で初の町長となった原田太八氏を先頭に町民一丸となって、北海道庁および内務省へ運動を展開していった。

8月11日、上京していた期成会委員は、内務省に陳情し、引き続き五日間、内務省と折衝し、多くの手続きを済ませて帰町した。8月28日から二日間、内務省係官の町政視察が行なわれ、係官の帰京後、内務次官より町議会へ意見を求められた。すぐに町議会は、意見書を内務次官に提出した。

その結果、9月29日附官報第三〇七号をもって留萌市が誕生することとなった。

10月1日、午前9時、留萌小学校の市制施行記念式典の会場には多くの喜びにあふれた市民代表の顔があった。来賓は内務大臣代理をはじめ道知事、札幌市長、函館市長代理、国会議員、道議会議員、管内町村長など多士多済な人々で埋まった。

式典は原田太八初代留萌市長の式辞に始まり、来賓祝辞、祝電代読、玉置信一促進期成会長の経過報告、伊佐津和平市議会議長挨拶、功労者の表彰等が行なわれ、最後に祝典に入った。また、当時留萌に駐屯していた進駐軍の将兵の代表も出席し、参列者から万雷の拍手をうけたといわれる。

市制施行記念の祝賀行事は10月1日から10月3日にかけて市内の各所で、多くの催物が行なわれた。10月2日には午前8時に留萌神社に市民が集合し、祈願のあと旗行列を行った。神社から港をまわり市役所前をとり留萌小学校

で解散というコースだった。沿道には市民があふれ、行進はトランベットの行進曲にのって行なわれたという。この年はニシン漁も豊漁であり、すべてに活気に満ちており、行列に参加した市民も、沿道の市民も、留萌のこれからの発展を信じてうたがう者はいなかったのである。そして、この三日間は市民が喜びをわけあつた三日間であった。

ものであった。この異常な速さは、ひとえに三万留萌町民の市制施行に対する熱意のあらわれということができよう。戦後の混乱の時代、日本国がこれから生きてゆく道を模索しはじめようとする時に、北海道の一町にすぎない留萌が、町民に将来への希望をもたせ、留萌の進むべき道をきり開いていたことは敬服に値する。我々留萌市民はこの先人たちの感慨を感じ、留萌の未来をつくってゆかねばなりません。



昭和22年ごろの留萌町

るもい

●特集 広域観光ランド構想

昭和62年1月/発行・留萌市 編集・総務部秘書企画課 印刷・留萌印刷株式会社

1987

1